

私の環境学

白井 宏昌

環境建築デザイン学科

滋賀県立大学、環境科学部に教員として着任すると、その年度の年報で「私の環境学」というテーマで自論を展開するのは、ここ数年の慣習だという。このテーマで何が書けるだろうか。しばらくの間漠然と考えていると、ぼくにとって「環境」という概念は常に決まったものではなく、随分と変わってきたものだということに気づいた。大きくは大学の修士課程で建築を学び、その後実務の世界で建築設計に携わっているときに考えていた「環境」。そして次に、一度実務を離れ、社会科学の分野で学際的に「都市」の研究をしている際に対峙した「環境」。さらには滋賀県立大学に着任して、その豊かな風景と向き合うことになった「環境」。大きくはこの3つの「環境」がぼくにとっての「環境」ということになるのかもしれない。それらは、自分のキャリアとともに、生まれては新しいものに取り替わっていくというよりは、次々と積み重なっていくもののように思える。本稿ではぼくにとっての「環境」の変遷を時系列的に述べていきたい。

免罪符としての「環境」

建築の勉強をする者にとって、「環境」という言葉は「環境工学」、「都市環境」など、大学在学中に様々な場面で耳にする言葉であるが、ぼくの場合は、最初に学んだのが理工学系の建築分野だったこともあり、やはりその多くは工学的視点で語られていた。しかし生意気ざかりの学生にとって興味の対象はもっぱら建築の意匠的な側面に向けられ、学生時代は漠然と「環境」という言葉と接していように思う。しかし、卒業後、建築設計の実務に従事するようになってからは、「環境」という言葉は自分が設計する建物がその外部に及ぼす影響を考える際に出てくる概念、あるいはその室内の快適性を担保するために考えるものとして向き合うものと捉えていくようになった。そして時代は1990年代後半。世界的に「環境」への意識が高まり、それが建築のデザインにどのように展開できるか、多くの建築家が模索を始めていた時期でもあったのだろう。「環境」を「技術」の問題として捉え、数値化された「環境」を制御する技術を纏うような設計手法が、多くの建築設計の場で試されていた。「ハイテク建築」なんていう言葉も生まれた。特に組織の設計部に属し、デザインとエンジニアリングが同列で(あるいはエンジニアリングが

より大きく)語られる職場にあっては、建築が「環境」と接点を持つのは、どちらかという工学的な領域であることが多かった。

しかしながら、ぼくはそこにある種の違和感も覚えた。「環境」というものを意識すればするほど、そこには数値化された世界を「制御」するという視点が多くなり、勢い、そこで消費されるエネルギーを最小化することが建築の大きなコンセプトになりかねなかったからだ。建築家が「環境」を語ることで、それが建つ根拠を与えられる、まさに「環境」が建築にとっての「免罪符」のようなものになっている危惧をそこに感じたのだ。この違和感はその後、オランダ人建築家レム・コールハースのもとで働くときにも感じたことである。ハーバード大学教授を務め、現代建築の巨人といわれる彼も注意深く「環境」という言葉を使うのを避けていた。彼が疑問視したのは「環境」という名のもとに「建築」を支える多様な文化的・社会的背景が隠ぺいされてしまう危険性であった。それはぼくが日本で感じた違和感とも相通ずるものがあるように思えたのだ。しかし、時代はますます「環境」という概念抜きに「建築」を語ることが困難になっていった。コールハースも世界中から「環境」に関するレクチャーをすることが求められるようになったが、実際そのテーマを自身の建築デザインと照し合せて語ることは少ない。語るにしても、2009年4月に自身が教鞭を執るハーバード大学で行った講演「Sustainability: Advancement vs. Apocalypse(持続可能性：前進と黙示録)」のように、客観的に建築が「環境」に対して対峙してきた歴史を語るように、その扱いは細心の注意を払っているように思える。

部分としての「環境」

このように、時代が「環境」と対峙することを強く求めていく中で、「環境」を面等向かって語ることに違和感を覚えながらも、ぼくは一時的に、建築の実務から離れて、社会科学の分野で現代都市の研究を始めた。場所はロンドン大学政治経済学院(LSE: London School of Economics and Political Science)の都市研究科(Cities Programme)。都市を政治、経済、社会学としてデザインの問題として学際的に研究することを目的として設立された学科

で、多様なバックグラウンドの研究者が集まっていた。ぼくがこの組織の博士課程に入ったのが2006年で、ここでも「環境」は議論の対象であった。特に、気候変動が経済に及ぼす影響をまとめた報告書「The Economics of Climate Change (気候変動の経済学、通称スターン・レポート)の著者、ニコラス・スターンが学内で教鞭を執っていたこともあり、「環境」は学内の多くの部門で、大きな学術的な関心となっていた。ぼくにとって重要だったのは、「環境」が建築設計の場で語られていた工学的な視点とは違う点、より学際的な視点で議論されていたことだった。そして、このことがその後のぼくの「環境」に対する考えを大きく変えたように思う。



(図1)：持続可能性(sustainability)を支える3本の脚
(経済・社会・環境)

<https://ryanharbdotorg.wordpress.com/2013/02/27/permaculture-and-sustainability-whats-the-difference/>

社会科学系の大学であるLSEで盛んに議論されていたのは学際的な意味での「持続可能性」である。そしてこの「持続可能性」とは3本足のテーブルに例えられるように、「経済」「社会」「環境」の3つの柱からなる。別の言い方をすればこのうちどれかが欠けていても「持続可能」な状態を作り出せないという。この3つの柱に基づく「持続可能性」は、国連など広く国際機関で用いられている概念であるが、恥ずかしながらそれまで、そのことを全く知らずにいた。ぼくの勉強不足もあったかもしれないが、建築デザインの分野ではこのような意図をもって「持続可能性」を語られたことはほとんどなかったように思う。前述したように建築デザインにとって、「環境」とは、多くの場合工学的な関心だったのだ。しかしながら、LSEでの経験は「環境」とは建築・都市が持続可能であるための「部分」であり、「経済」「社会」という概念と切り離せないという自明の理をぼくに教えてくれた。そしてなぜかそのことでふっと気が楽になったように感じた。それまで大上段に「環

境」を語ることに戸惑いを感じていたが、今や「環境」を語ることは同時に「経済」を語ることであり、「社会」を語ることだと認識するようになったのである。

LSEでのぼくの研究テーマは「オリンピックと都市」。特にオリンピック後も開催都市に影響が残る「オリンピックレガシー」に関して、当時2012年の大会に向け、開催準備を進めつつあったロンドンを事例として研究した。そしてこの「オリンピックレガシー」なる概念も都市の「持続可能性」に即して論じられ、当然そこには「環境」も重要な要素として考えられている。実際、都市の「環境」を破壊することなくオリンピックを開催できるか、あるいはオリンピック開催によって都市の「環境」を向上できるかは、1990年代頃より開催都市あるいは国際オリンピック委員会(IOC)の大きな関心事であった。これは1995年にIOCが初めて「スポーツと環境委員会(the Sport and Environment Commission)」を設立し、その後2000年に夏季オリンピックを開催したシドニーが自身の大会を「グリーンな大会(the Green Games)」と位置付けたことから、その動向が伺えよう。しかしながら、21世紀に入り「オリンピックレガシー」という概念がより重要視されるようになってからは、より包括的な意味での「持続可能性」が叫ばれるようになってからは、「環境」とともに「経済」的あるいは「社会」的な持続的発展のためにオリンピックはどのような貢献ができるかが大きな課題となっていった。「オリンピックレガシー」を重要なキーワードに掲げた2012年ロンドン大会が「これまででもっとも環境に優しい大会」としながらも「社会的な大会：the Social Games」としてオリンピックを契機にロンドン市内に存在していた「社会」的格差の是正を目指したのは、このようなオリンピックの変容を如実に物語っているだろう。ここでも「環境」はより包括的な意味での「持続可能」な都市を作っていくうえでの、重要な「部分」として位置づけられ、重要なのはその全体性にあり、それを体系的に機動させる都市政策の重要性が、「オリンピックと都市」の研究を通じて考えたことであった。

「現実」としての環境

ロンドンでの研究を終え、日本に帰国してから、滋賀県立大学で教鞭を執る機会を得たことにとって、「環境」とはまた別な意味を持つようになった。思えばぼくはそれまで、東京、北京、ロンドンなど、いわゆる大都市にしか住んだことがなかった。そこで語られる「環境」とは「人工」とも「自然」ともつ

かず漠然としたもの、どこか捉えどこのないもののように感じられたのも事実である。それゆえ、「経済」や「社会」といった概念と一緒に考えることで初めてリアリティを感じられたのかもしれない。ところが、実際に滋賀県に拠点をもち、雄大な琵琶湖や周囲の山々に囲まれていると、「環境」に対して都市部とは異なる感情を持たざるを得ない。日々刻々と姿を変えるこの圧倒的な自然を前に、「環境」とはそこに実際に働きかけていくもののように思えてくる。もちろんここでも「環境」を考えることは、この場所の「経済」や「社会」を考えることであることは変わらないのだが、この場所にいると、自分の「身体」を通して直に触れるもの、そして目に見えるものとして対峙するもののように感じられる。この感覚は、地域の公園整備など、大学での様々なプロジェクトを通していよいよ現実的な課題として自分に降りかかってくる。今やぼくにとっての「環境」とは客観的に捉えるものでなく、主観的に働きかけていくものになっている。別の言い方とすれば、主観的に働きかけていくことで初めて、その意味を客観的に考える対象となっている。このことがとても新鮮で心地よい。そして、ぼくにはちょっとした仮説がある。それは現在の日本には、地方での教訓が都市部への教訓となっていく概念が数多くあるというものである。もちろん、都市部から地方へと流れていくものもたくさんあるだろうが、地方から都市へ移植できる知のリソースも多く存在するはずだ。その実践の場としての滋賀県での「環境」への取り組みがあると今考えている。